

モンゴル族の開國傳説と移住の問題

田村實造

モンゴル族の始祖説話　モンゴル族の開國傳説（始祖説話）について最初につたえているのは元朝秘史である。いま秘史の冒頭にみえる一文を譯してみると

上天の命をうけてうまれたブルテチノ（蒼い狼）があつた。その妻のゴアイマラル（美しい牝鹿）があつた。

かれらは騰吉思（大湖）を渡ってきてオノン河の源に、不兒罕合勒敦（神が嶽）にすまいして巴塔赤罕をうんだ

〔これがモンゴル族の始祖である〕

という。これによると、どの方向からとはわからぬが、天命をうけてうまれた蒼い狼とその妻の牝鹿とが、大きな湖をわたってやってきてオノン河源の神が嶽に住みつき、そこで子孫が繁榮したということである。⁶¹⁾

これはあきらかに移住説話である。いまひとつはドーン

ンの蒙古史に引用されているペルシアがわにつたえられたモンゴルの開國傳説である。⁶²⁾これはラシッドの年代紀彙集にみえるもので

チンギス・カーンがうまれる二千年前に、モンゴル人は他の民族に征服されて絶滅した。そのとき二人の男子と二人の女子とが死をまぬがれた。その男女は Irghun 山脈によってさえぎられた地方に避難した。中略かれらの子孫は、この地で急速に増加して部族にわかれた。かれらはやがて山脈中の鐵鑛を採掘した坑道を爆破し、通路をひらいて山脈をこえることができ

とあり、ドーンは他の史料を参考して、これにつづけて第八世紀の中葉にエルグネ山脈からでた人びとはオノ

ン河・ケルレン河・トラ河などの河畔に定住して多くの部族を形成した。かれらの多くはブルテチノを推戴して首領とした

という。これも移住説話であるが、このなかでエルグネ山脈中に避難したとあるのは、後述するように一つのてがかりをあたえてくれる。ところがモンゴル族のこの移住説話は、その後一六三〇年ごろ編纂されたモンゴルがわの史料

黄金史^{アルシニア} Altan Tobci や、^{エルテネイニ、エリチ} 元史^{エルテネイニ、エリチ} 卷一六六二年に編纂された蒙古源流^{エルテネイニ、エリチ} Erdeni yin Tobci⁵⁾ には

ブルテ・チノがチベット地方から北の方テンギスという海をわたり、道を東方にとってバイカル河畔にそびえるブルカン・カルドンという山にいたった

とあつてチベットの原住地から東北にむかつて移住したように記し、移住の方向づけをしている。

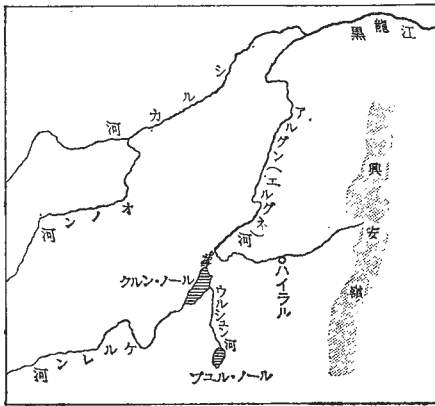
以上あげたモンゴルがわの始祖説話によると、モンゴル部族の原住地はオノン河源のブルカン山附近ではなく、かれらはどこからか移住してきたことになる。とすれば原住地はどこであったのだろうか。これについて、まず手がかりをあたえてくれるのは、兩唐書の室韋傳の一節である。

つぎに原文のまま引用してみよう。

最西有烏素固部、與回紇接、當俱倫泊之西南 中略 北有大山、山外曰大室韋、瀕於室建河、河出俱倫、迤而東、河南有蒙瓦部、其北落坦部、水東合那河・忽汗河、又東貫黑水靺鞨 中略 東注於海 新唐書卷二一九室韋傳

今室韋最西、與迴紇接界者烏素固部落、當俱倫泊^{ムルン}之西南 中略 其北大山之北有大室韋部落、其部落傍望建河居、其河源出突厥東北、界俱輸泊屈曲、東流經西室韋界、又東經大室韋界、又東經蒙兀室韋之北、落祖室韋之南、又東流與那河・忽汗河合、又東經南黑水靺鞨之北・北黑水靺鞨之南、東流注于海 舊唐書卷一四九下室韋傳

このうち舊唐書室韋傳にみえる部落名「蒙兀室韋」は、新唐書室韋傳の「蒙瓦部」にあたることはあきらかである。前者すでに王國維も考證したように、⁶⁾モンゴル部の音譯とみてよからう。そこで蒙瓦室韋または蒙兀部の位置をかかえるにあたって、その手がかりを新唐書の記載にもとめてみると、俱倫泊とは北滿ハイラル市の西方のクルン・ノール（呼倫泊）のことである。室建河は譯音からすればシ



唐代モンゴル族住地略図

ルカ河をさしたのであろうが、ここに挿入した略地圖からもわかるように、シルカ河にはオノン河が合流し、やがてシルカ河は東北流してアルグン河（エルグネ河）に合流したのちは黒龍江とよばれる。

新唐書にこのシルカ河（室建河）が俱倫泊にでるとあるのは、このあたりがあまりに僻遠地であるために、新唐書室韋傳の編者の地理的知識があいまいであったものとみれば、いちおうの説明はつくであらう。しかし唐書の一文に即してかんがえるならば、今日この附近の地圖（略圖参照）

によると、クルン・ノールから北流してエルグネ河ちかくの無名湖にそそぐ川がある。もしこの川がふるく唐代にエルグネ河に流入しており、またエルグネ河がシルカ河と合流する以南の部分までも唐書室韋傳の編者がシルカ河と解していたとすれば「河（室建河）は俱倫に出で、辿りて東す」といったとしても、まったくの見當ちがいともいえないであらう。そして「河の南に蒙瓦部あり」の一文から蒙瓦部の住地を推定すれば、當時この部はエルグネ河唐書の室建河の南方、俱倫湖およびハイラルの北方の草原に遊牧していたものと解されるであらう。

そこで前引のドーソン蒙古史にみえるラシッドの年代紀彙集に「死をまぬがれたモンゴルの男女が、エルグネ山脈中にかくれたが、のちにその子孫の人びとがここをでて繁榮し、多くの部族にわかれた」とある一文をふりかえってみると、ラシッドはいかなる史料によったかは知りえないが、はからずもエルグネの名が、河の名でなく、山の名としてペルシアがわにも、つたえられていたことに氣づくであらう。

なお、新唐書室韋傳の記載にもとづいて、さきに引用し

た舊唐書室韋傳をよめば、望建河は室建河と同一の河をさすものであり、俱輸泊はうたがいもなく俱倫泊であることがわかる。したがって蒙兀室韋部の住地は、蒙兀部とおなじ場所をいったものであることも推定される。兩唐書の文面からすれば、唐代にはモンゴル部はまだ弱小部族であって、有力な室韋部族に服屬していたようである。舊唐書が蒙兀室韋部といって、室韋部族であるかのように記しているのも、モンゴル部が室韋部の勢力下にあったのを、舊唐書室韋傳の編者が混同したためであろう。

遼・金時代のモンゴル部 遼金時代一二世紀のモンゴル部の住地についてみると、最初にあげられるのは、胡嶠の陷虜記のつぎのような一文である。

契丹東北至轆劫子、其人鬚首たれがみ披布爲衣、不鞍而騎、大弓長箭、尤善射、遇人輒殺、而生食其肉、契丹等國畏之、契丹五騎遇一轆劫子、則皆散走、其國三面皆室韋

この陷虜記は、五代晋の同州陝西省郃陽縣令の胡嶠が、遼の世宗天祿元年（九四七）から七年間契丹本國に滞留したのち、後周の廣順三年遼の穆宗、應歷三年953に歸來して、その行記

および滞在中の傳聞を記録したものである。⁽⁶⁾したがってここに引用したのも、遼の世宗から穆宗のはじめごろまでのものとみてよからう。

陷虜記の轆劫子については、箭内互・白鳥庫吉兩博士はこれをバイカル湖の南方からオルコン河、セレンガ河流域にうつってきた騎馬民族の Merkit に比定されたが、⁽⁷⁾王國維はその著遼金時蒙古考（觀堂集林卷一五）において、これを兩唐書室韋傳の蒙兀部の譌轉であるとし、遼金以後の諸書に梅古悉・謨割失・毛割石・毛揭室・毛揭室韋・萌古子・盲骨子・蒙國斯・萌子・蒙子などの文字でうつされるものとおなじく *Moitrol* またはその複數の *Moitrols* の音譯であるという。王國維の説にしたがうべきであろう。⁽⁸⁾

轆劫子が *Moitrols* の音譯で、蒙兀部とおなじくモンゴル部をさすものとすれば、胡嶠はこの部の位置を「契丹東北」という。かれのいう契丹とは遼の國都である上京臨潢府のことであるから、蒙兀部すなわちモンゴル部は遼の上京の東北におり、かつまた「其國三面皆室韋」とあるところから推して、その住地はさきに引用した兩唐書の蒙兀室韋・蒙兀部の住地とはほぼ同一地方とみてよいであろう。も

っとも韃劫子部落の位置がさほど正確なものでないことは、この韃劫子が人をころしてその人肉を生食するとか、契丹人の五騎がたばになつても一韃劫子にかなわないなどという記事からかんがえて、遼初の世宗・穆宗時代には契丹族とモンゴル部とはほとんど没交渉で、契丹人はこの部族に關して、ただ他の部族からの傳聞による知識しか有していなかったとみるほかないようである。さらにこの推測をうらぎけるのは、かつて九二四年から二五年にかけて敢行された太祖阿保機の西征のとき、契丹人はとおくオルコン河上流のウイグル故都カラ・バルガスンにまで遠征しているから、そのころもしモンゴル部がすでにオノン河上流域に移住していたならば、契丹人とのあいだになんらかの交渉があつて、モンゴル部に關し多少でも正確な知識がなくてはならないはずである。このようにかんがえてくると、一〇世紀なごころモンゴル部は、まだ唐代とおなじ地域に遊牧していたものとおもわれる。

ところが、おなじ遼代の記録でも契丹國志になると

正北至蒙古里國、國無君長所管、亦無耕種、以弋獵爲業、不常其居、每四季出行、惟逐水草、所食惟肉酪而

己、不與契丹爭戰、惟以牛羊駝馬皮裘之物、與契丹爲交易、南至上京四千餘里契丹國志二二一
四至鄰國地界

とて、蒙古里國すなわちモンゴル部を上京の正北におき、かつかれらに關する知識もより具體的である。それは「契丹と交易をなす」とあるように、モンゴル部と契丹人が交易關係にはいったためであらう。契丹國志は南宋の葉隆禮の撰で、一一八〇年に成り、中國史料に依據して遼國の歴史や地理や制度を紀傳體風に記述した書である。そのうちここに引用した蒙古里國に關する部分は、趙志忠の陰山雜錄によつたものといわれる。趙志忠は宋の仁宗の慶歷元年（一〇四一）に遼國から歸來して宋朝に任官した人物であるから、陰山雜錄にみえる遼國關係の知識は、かれが遼朝に任官していた當時、すなわち興宗の重熙一〇年（一〇四一）以前のものとみてよい。

そこで契丹國志の蒙古里國の記述と、さきの陷虜記の韃劫子の記載とをくらべてみると、蒙古里國の記事がより實態に忠實であるようにおもわれる。すなわち、その生活は狩獵と牧畜とをいとみなみ、家畜としては牛・羊・馬・駱駝などを畜牧しているが、しかし「國無君長所管」といえ

ば、かれらはまだ部族連合體的勢力は結成していなかったようである。またかれらは上京の正北にあって、契丹人と平和な関係のうちに皮毛などの交易をおこなっていたといえ、遼國とは、さほどとおくはなれてもいなかっただようである。このような遼國との関係をかんがえてみると、契丹國志につたえられる一一世約前半ごろのモンゴル部は、胡嶠の陷虜記がつたえる轆劫子の住地、すなわち唐代以來の原住地から南下してオノン河の流域に移牧していたものとかんがえられる。

モンゴル部がオノン河流域にうつったことを元朝秘史にもとめてみると、ボルヂギン氏族の始祖といわれる孛端察兒ボグテンチヤルの一二世孫が、その兄たちから見すてられて

孛端察兒は 中略 青馬にのつてオノン河にしたがつて
行き巴勒諱阿喇バレグユンア(河中島) に到つて、そこに草のいほりをつくつて住んだ

とみえるのが、はじめである。そこで秘史にみえるこの孛端察兒のオノン河流域への移住説話こそ、陷虜記の記載(一一世紀なかごろ)以後契丹國志すなわち陰山雜錄の記載(一一世紀前半ごろ)以前におこなわれたと推定されるモン

ゴル部族の原住地からの移住の事實を、孛端察兒という一個人に假托して、語りつたえているものではあるまいか。

一個人とはいっても孛端察兒はモンゴル部族の主體をなすボルヂギン氏族ボグの始祖とあおがれている人物である。ボルヂギン氏族には札木哈をだしたヂャダラン氏族も、またアバガイ・カーンの屬したタイチウト氏族も、あるいはまたカブル・カーンやチンギス・カーンの屬したキャン氏族もみなふくまれるのである。したがって孛端察兒の移住説話には、そのままモンゴル部族の移住がかたりつたえられているものといつてもよいのではあるまいか。ちなみに、ドーンソンの蒙古史(第二章)は孛端察兒を一〇世紀はじめにおいているが、それはいかなる根據によつたものかわからない。

それではモンゴル部の移動南下は、いかなる事情によつておこつたのであろうか。しられるように九世紀なかごろウイグル王國がキルギズ部の襲撃によつて崩壊し、部族をあげてオルコン河畔の根據地から南方の長城地帯や河西地方やまた西域の各地に散走すると、モンゴリアにはその後一三世紀のはじめチンギス・カーンの出現まで約三五〇年

間、統一勢力はおこらなかった。その間、モンゴリアでは遼朝および金朝の支配下において、モンゴル系部族とトルコ系部族とが若干の部族集團にわかれて、たがいに抗争をつづけていた。したがって、諸部族の移動や離合集散もたえずくりかえされたことであろうし、モンゴル部のオノン河域への移動も、その一連のうごきとみるべきであろう。⁶⁰ さて、モンゴル部は金代になっても、ひきつづきオノン河域に住牧していた。金代のモンゴル部についてつたえる最初の史料は完顔希尹の神道碑の一節である。

尚書左丞相兼侍中、加開府儀同三司、監軍仍舊、萌古斯擾邊、王（完顔希尹）偕太師宗磐、奉詔往征之

この一文については、すでに外山軍治「金熙宗朝に於ける蒙古の侵寇」蒙古學 第二に考證されているように、萌古斯

Monols が金の熙宗の天會一三年（一一三五）ごろ金國の邊境を侵擾したので、この神道碑の主人公である完顔希尹が、宗族の太師公宗磐とともに征討軍をひきいて出陣したことをのべたものである。建炎以來繫年要錄卷九 六にもこの事件をつたえて

紹興五年（一一三五）この冬金主の熙宗 皇帝寘は蒙古が叛

いたので、領三省事宋國王宗磐をつかわし兵をひきいて之を破らしめた。蒙古は女眞の東北にあたり、唐代の蒙兀部である。その部民は勁悍で善く戦い、夜中でもよく視ることができると。鮫魚の皮で甲をつくり流矢を捍ぐ

という。このときのモンゴル部の侵寇が金國にかなりのショックをあたえたことは、重臣である宗磐が希尹とともに出陣した事實からも十分に推測されるであろう。その後にも金がわや南宋がわの史料は、モンゴル部がたびたび金國の邊境をおかしたことをつたえている。繫年要錄によれば紹興九年（一一三九）女眞萬戸呼沙呼は蒙古部を北征したが、糧食が盡きて還った。蒙古はこれを追襲して上京金の國都の西北にいたり、大いにその衆を海峽に敗つた

といい、そのほか同書には紹興一三年（一一四三）および紹興一七年（一一四七）にも蒙古部の侵寇をつたえている。とくに紹興一七年の條には

三月、蒙古と金人とがはじめて和し、兩者は歲ごとに牛・羊・米・豆・綳などをおくりあった。そこで

蒙古の鄂倫貝勒は自ら祖元皇帝と稱し、天興と改元した。金人はこれまで連年兵を用いたが、ついに蒙古を討平することができなかつた。

という。祖元皇帝と自稱した蒙古部酋の鄂倫貝勒なるものが、はたして元朝秘史のだれにあたるのか判明しないし、またこの文章にも金國を敵視する南宋人としての感情から、金がモンゴルになやまされたことに對し、いくぶんの誇張はあるにしても、このころモンゴル部がかなり有力な部族集團をなしていたことは十分に推測されるであらう。いま引いた一文の末尾にも「金人はモンゴル部に對し連年兵を用いたが、ついにこれを討平することができなかつた」というように、金國としてはモンゴル部のたびたびの侵寇に手をやいていたらしい。南宋の建炎三年（一一二九）に通問使として金廷におもむき、完顔希尹の封地である冷山東京會寧府の北二〇〇餘里に十數年抑留されていた洪皓が、歸國したのち北地での傳聞をしるした松漠紀聞のなかに

首骨子モンゴッスは其人長さ七・八尺、中略 金人と一江をへだつ、常に江南に渡つてきて寇をなす。これを禦げば返り、如何ともなしえない

とみえ、あるいはまた外山氏も指摘したように、洪皓自身が宰相の秦檜に金國の内情をつたえたなかに「かれまさに蒙兀に困しむ」宋史卷三七 三洪皓傳といっていることなどは、そのことをうらがきするであらう。

このように、モンゴル部が金國に對してはげしい侵寇をくりかえしたことからすると、モンゴル部は金の熙宗の時代にあたる一二世紀前半ごろ——それはさきに引用した契丹國志の記事より約一〇〇年を経過しているが——になる、すでにかなり強力な部族連合體としてのモンゴル・ウルスを結成して、有力な君長も推戴していたことが推測される。このころのモンゴル部といえは、テムチン（チンギス・カーン）のうまれる二〇〇〜三〇〇年前にあたるから、元朝秘史にみえる合不勒カーンカンブルから俺巴孩アンバガイカーンおよび忽圖刺フクトカーンのころにあたるものとかんがえられる。秘史によれば、海都の曾孫にあたる合不勒は「普きモンゴルを合不勒カーンが管治した」といって、モンゴル・ウルスの首長として、はじめてカーンを稱している。合不勒についてカーンとなつた俺巴孩（タイチウト氏）は、やがて同族のタル部の部民にはかられ、金廷におくられて殺された。44

わった合不勒の子の忽圖刺カインは、俺巴孩の遺言にしたがいタタル部とはげしく戦つて勇名をはせたといわれる。

クトラがカインになると、弟の合蒼安太石（太子）と二人でタタル部のところに出馬した。タタルの闊端巴喇合・扎里不花二人のところに十三度戦つてアンバカイ・カインの仇をかえし、怨みをむくいた。

タタル部は數部にわかれ、そのころクルン・バイル草原、主としてクルン・ノールとバイル・ノールをつらねるウルシユン河域に遊牧しており、金國に服屬し、その熟蕃として金國のために邊境防衛の一翼をになつていたようであるから、俺巴孩カインをとらえて金廷におくつたのも、金國へのタタル部の忠義だてであろう。

それでは、このころのモンゴル部はどこにいたのか。完顔希尹の神道碑には、宗磐・希尹らの出軍を北征といい、建炎以來繫年要録には前引のように「蒙古は女眞の東北にあたり、唐代の蒙兀部である」という。希尹らは當時の金の國都である上京會寧府黑龍江省阿城縣、ハルビン市の東南から出陣しており、繫年要録の女眞もおなじく上京會寧府をさすものであらうから、兩者の文面からみれば、モンゴル部は金國の都

上京から北ないしは東北の方面にいたことになる。しかし他方さきに引用したおなじ繫年要録の紹興九年の條には、蒙古が女眞萬戸の呼沙呼の軍を追襲して上京の西北にいたつたといひ、事實、元朝秘史をみると、俺巴孩カインがタタル部にとらわれて金帝のもとに送致される事情を記したすぐつぎに「そのころ也速該・巴阿秃兒チンギス・カインの父は斡難河に鷹をいに行く時」とみえるところから推して、これらはオノン河域にいたことがわかる。また也速該は、その子テムチンの嫁を婚約しての歸途、タタル部民に毒をのまされたのち三宿してわが家にたどりついたといへば、モンゴル部はウルシユン河域に遊牧していたタタルの一部族とは、もつとも近いものでわずか騎馬で三宿くらいの距離にいたこともわかる。してみると、このころのモンゴル部の主力は、オノン河の下流域か中流域あたりに遊牧していたことになる。もし、はたしてそうだとすれば、元朝秘史の冒頭にあるようなオノン上流の不兒罕嶽（神が嶽）附近に居住するようになったのは、その後のこととみねばならない。元朝秘史によれば、也速該の死後タイチウト氏を中核とする部族集團に見すてられた未亡人訶額命とテム

チンら孤兒たちは、タイチウト氏族の迫害をのがれてオノン河をさかのぼり、ついにブルカン嶽の南にあたる桑古兒河畔の湖水のほとりに家居し、野鼠などをころして飢をしをいだという。⁶⁸⁾

以上によってモンゴル部の移動のあとをみると、かれらは唐代の原住地であるエルグネ河流域から、おそらく十一世紀はじめごろ移動し（ポダンチャル説話）、やがて一二世紀前半から後半ごろにはクルン・ノールをこえてオノン河の流域をその遊牧圏としたようである。ただテムチン一家は、父のエスガイ・パートルの死後はモンゴル部の主力——タイチウト集團——からみすてられたので、オノン河をさらにさかのぼって上源のブルカン山附近に移住したようである。したがってブルカン山が有名になったのは、テムチンがチンギス・カーンとして統一勢力を樹立した以後のこととかがえねばならない。

このようにモンゴル族の原住地からオノン河域への移動、とくにテムチン一族のブルカン嶽南麓への移動をかたりつたえたのが、元朝秘史の冒頭の始祖説話であろう。したがってこの説話にみえる騰吉思湖^{チンギス湖}は、^大、^湖、^は、^しいて實在の湖に

比定するとすれば、クルン・ノールとみなすべきであろう。

つぎに本稿のはじめに引用したように、元朝秘史以後にでたモンゴルがわの史書である黄金史^{アウグシニフ}や蒙古源流^{モンゴルユウリウ}に

チベットから北の方テンギスという海をわたり、道を東方にとつてバイカル河畔のブルカン山にきた

などと、これまでみてきた事實とはまったく反対にチベットを原住地に、そこから東北に道をとつて移住したようにいつているのはなぜか。おもうに、これはラマ教の傳播にモンゴル部族の始祖説話をむすびつけたものである。これは、黄金史や蒙古源流は元朝秘史とちがって、その原據をおおくチベット史料にもとずいているからではあるが、一つにはラマ教という宗教の流傳が民族移動をも吸収してしまつた一例ともみられるであろう。

註

- (1) 内藤湖南博士は、かつて「蒙古開國の傳説」(讀史叢録所收)において狼と鹿あるいは狼と女人との交合から部族の始祖がうまれたという説話は、古代トルコ族間に流布した傳説であるこ

とを、漢書張騫傳にみえる烏孫族の説話や北史高車傳その他から例證したのち、この元朝秘史の狼・鹿交合説話はトルコ族のものが混入したのであらうと推測された。これに對して三品彰英博士は、このような狼と鹿、狼と人との交合によつて始祖がうまれたとの説話は、トルコ族だけでなく、ひろくアルタイ諸族やブリヤート族・チベット族などのあいだにも存在することを例證し、これらはみな狼のトーテムにはかならないこと。それは人畜にくわえる狼の害が人びとにおそれられた結果神獸視されたもので、ひろく世界各地にみられるものであるという(滿鮮諸族の始祖神話について(三)、史林二七の二)。したがつて元朝秘史の始祖説話も、トルコ族からとりいれたもので、モンゴル族本来のものでないと、いちがいに考える要もなく、やはり古來モンゴル部族のあいだに傳承された説話とみてよいであらう。

- (2) D'Ohsson: Histoire de Mongols, Vol. 1.
 (3) 田村實造 殿版蒙古源流について(岩井博士古稀記念論文集、昭和三八年六月)
 (4) 蒙古源流にはブルテ・チノを人名とし、かれの父はチベット開國の祖ニャチャマンボ Seger Sandalitu Qayan 七世の孫にあたるという。
 (5) 王國維 遼金時蒙古考(觀堂集林卷一五)
 (6) 胡嶠の陷虜記は陷遼記、あるいは陷北記ともいわれる。胡嶠は會同一〇年(947)遼の太宗が華北に侵入したとき、汴京留守となつた蕭翰の掌書記となり、やがて蕭翰の北歸とともに

北方に連れ去られ、遼國內の各地を旅行した。なお陷虜記の詳しい内容については田村、遼・宋交通資料註稿(東方史論叢第一、昭和二年七月)参照

(7) 箭内互 韃靼考(蒙古史研究五三八頁)

白鳥庫吉 室章考(史學雜誌三〇〇七、七四八頁)

(8) 拙稿、遼・宋交通資料註稿(東方史論叢、第一、三〇八頁)

(9) 長澤和俊「遼の西北路經營について」(史學雜誌六六ノ八、

嶋崎昌「可汗浮圖城考」(東洋學報四六ノ二・三)参照

(10) 趙志忠については拙稿、遼淵の盟約と其の史的意義(中)(史

林二〇卷二號三三三頁、註(4)参照)

(11) モンゴル部族の南下移動は、ひとりオノン河域ばかりではなかつたようである。すでに王國維も「遼金時蒙古考」に指摘しているように、遼史天祚紀に *Mongols* の音譯とみられる護葛失の部族名が長城地帯に疊見する。

さらにまた同紀、保大四年(一一三四)正月の條には「天祚中略 陰山室韋・護葛失の兵を得た」とみえ、三朝北盟會編卷二一所引の史愿の亡遼錄には、おなじことを「陰山韃靼・毛割石兵」という。前者の陰山室韋は後者の陰山韃靼、前者の護割石は後者の毛割石であらうから、これによると一二世紀前半の遼末金初には、タタル部やモンゴル部の一部は、すでに陰山の左右にまで南下移動したのもあつたことが推測される。

(12) 金代の女眞族とモンゴル部との抗爭に關する史料は王國維「遼金時蒙古考」(觀堂集林一五)に多く引用されている。

(13) チングス・カーンの生年については諸説がある。たとえば、

那珂博士は一一六二年、蒙古源流もその歿年から逆算すれば一一六二年、ウラジミルツォフは一一五六年、ドーソンは一一五五年という。

(14) 那珂通世 成吉思汗實錄 初版本三一頁

(15) 同上書 三六頁

(16) 元朝秘史卷一によれば、儉巴孩^{チンバガイ}カインがタタル部にとらわれて金國皇帝のもとに送致される事情を記して

不餘兒納兀兒・闊連納兀兒二湖の間なる兀兒失温木連にいる
ウイリウト、ビルウトなる(二姓の)タタルの民に云云 成吉思汗
實錄三
一頁

という。箭内互博士も韃靼考(蒙古史研究所收)において、これにもとずいてタタル部の住地をウルシユン河域に比定している。

(17) 那珂通世、同上書六六頁

東洋史研究叢刊之十一

宋史職官志索引

佐伯 富編

體裁總クローズ製 A5 本文四二三頁

宮崎市定・宋代官制序説 六三頁

字劃索引 一一頁 定價 二五〇〇圓

本索引は、宋史職官志に含まれる官職・書吏・年號・地名・官制・經濟・財政用語、その他、あらゆる事項についての約三萬數千に及ぶカードを、五十音順に排列したものである。巻頭には、宮崎市定博士の「宋代官制序説」を解題として掲載し、兩々相俟って、宋代は勿論、中國の政治・經濟・社會・官制の研究者には、多大の便宜を與えるであろう。

右書御希望の方は本會までお申込み下さい。

(國內送料は本會が負擔します)

京都市左京區吉田本町 京都大學文學部内

東洋史研究會

振替京都三七八番